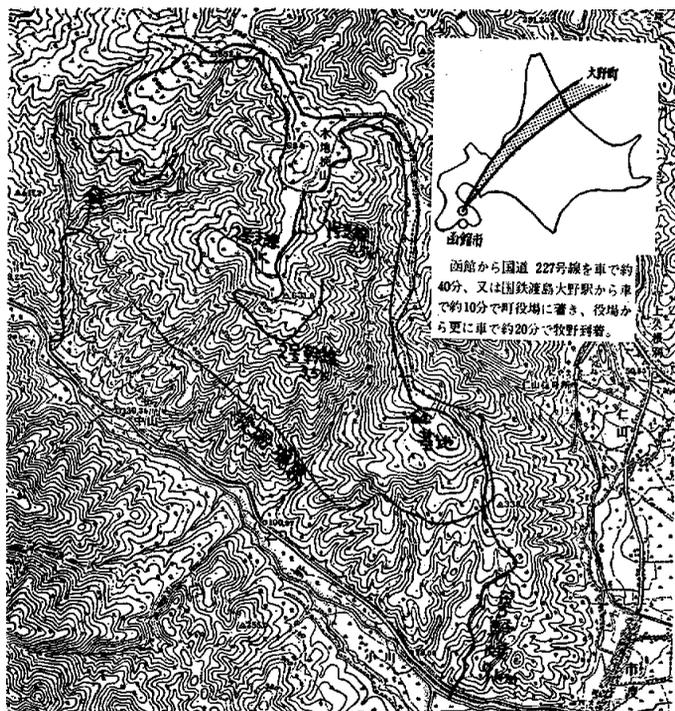


木地挽山のシバ牧野保護について

高 畑 滋



木地挽山は、渡島平野の北端にあって、標高六八四mのなだらかな丘陵性の山です。ここを中心に、総面積一、一九五haの大野町営放牧場がひろがっています。さらに東側の七飯町営牧野・仁山高原へとつながって、一帯が広大な草原地帯となっています。このような景観は、東北地方の北上山地や白神山地にもみられますが、ここほど大きなひろがりをもつところはありません。昔は、ほとんどがシバ植生であったのが、生産力が低いということ、草地造成によって牧草地化されるようになりました。大野町営牧野でも、いままでに木地挽山の両側の尾根の焼野地区・石川地区とも牧草地化されています。今度、最後に残った木地挽地区が、国営大規模草地改良事業で草地化されることになりました。シ

木地挽地区、草地開発事業
1号幹線は、既存牧道の改修、
その他の道路は新設



広大なシバ草原は、日本でも珍しく学術的にも景観的にも貴重なもの

バの北限にあって、日本一の景観を誇る木地挽山の芝地を保護すべきだと思ひ、次のように整理してみました。

一、木地挽芝草原とはどんなところか

大野町は北海道で最も古い農村の一つで十七世紀後半には村ができていたといわれます。周辺の山の牧野を使って、農耕馬の生産もさかんでした。炭焼き用に木を切つて、牛馬を放牧しているうちにシバ草原に

なつたとみられています。とくに中心の木地挽には七六五加の面積があり、広い尾根の部分はすべてシバにおおわれています。ここからは渡島平野を一望にみわたせ、函館山が海に浮かぶように、よく見えます。横津岳、七飯岳などを横にみながら、さらに目を東に転ずると、大沼・小沼ごしに駒ヶ岳が全ぼうを見せてくれます。

二、シバについて

ここで保護しようというのは、美しい花や実をつけるものではなく、稀少な種というものでもありません。シバは、学名を (*Zoysia Japonica Steud*) といつて、日本に固有の種ですが、南は沖縄から北は北海道まで分布しています。ふつう一つの種で、これはど広く分布しているものはいくつもないのです。それぞれの気候帯に応じて種の分化がおこり、別種として分布する例が多いのです。

しかしシバは、南ではピロウ樹の下に生え、北ではダケカンバとともに生えているなど興味ある分布を示しています。おおよそブナ林地帯に中心があるとみられるものの、北でも南でも分化せずに存在するということは、シバが特殊な条件下でしか優占できないためなのです。夏期高温多湿な日本では、シバのような短草型の草が優占するのは、家畜や人間の採食・踏みつけが必要です。もし自然に放置したままの条件では、大きい草から灌木に移り次第に森林となっていくことでしょう。気候的な北限と、大がかりな家畜の放牧とがつくり出した木地挽のシバ草地は、日本の草原植生を調べるうえで貴重な資料を提供しているところなのです。

三、学術的にも注目されているところ

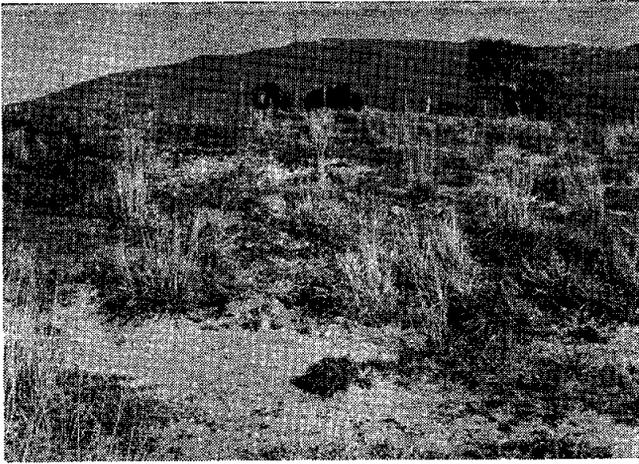
シバは美しい花をつけるものでもなく、稀少価値があるというものでもありませんが、植物分布の法則性をしらべて、自然のしくみを知るうえで重要なものとなっています。日本生態学会では、この地区を草原保護地域としてあげています。これは、日本生態学会自然保護専門委員会によって、ある程度人為の圧力が加わった状態で成立している草原を対象に、これらの草原が成立つ要因を学術的に検討する必要と、景観上からも保護を必要とすることからえらばれています。

また農林省では、草地試験場を中心に、「草地の動態に関する研究」で、全国的に各気候帯に対応する草地生態系における生物群集の動態を解明しようとしています。北海道農業試験場が分担している北海道地域の重要な調査地点がこの木地挽なのです。北方種と混在するシバの性質を調べるために、暖地で採取されたシバと現在比較中だということです。この研究を中心になつてすすめている草地試験場生態部長の

嶋田饒博士は、「研究結果がでたときに、肝心のシバ草原がなくなっていたのでは大変だ、なんとか残せないものか」と心配されています。現地で調査をされたことのある千葉大学理学部長・沼田真博士も、「日本にとつても貴重なシバ草原だ」と、著書の中で折り紙をつけておられます。このような自然が永年かかってつくりあげた見事な「草原教室」を、安易にこわしてしまふのはやめなければなりません。

四、環境保全上危険な造成

この一帯は木地挽燦岩台地ということで安山岩集塊岩風化層の上に、「駒ヶ岳 f・e・d」という火山灰層が順におおつているところなのです。この火山灰層はいずれも力に乏しく、f 層、d 層には浮石層や、粗砂層があつてきわめてくずれやすいところなのです。こんなところをブルドーザでかきまわしたらさいご、草も生えずに侵食・崩壊をくりかえす危険があります。現在、草地造成したところでも、一部浮石層が出てはげているところもあります。木地挽地区でも、車が通つた跡が侵食によつてけずられ「すじ」として残っているのがみられます。木地挽のように広大な尾根となつていて、大



ブルドーザで表土をけずると、駒ヶ岳火山灰浮石層が出て、牧草も生えなくなる。

量の表面流水水によって大きな侵食につながるものです。こういうところでは、永年かかってつくりあげられたシバ草原が一番強いのです。

シバは匍匐茎というものを出して、地表面をしつかりと抑え、水でくずされるのを防ぎます。また、家畜の蹄によるかき荒らしにも最も強いものです。少しばかり生産力が低いからといって、このような防災上に果たす役割を無視してはいけません。何よりも安全第一で、軽石の上に何百年もかかってつくりあげたシバ草原をもっと有効に使うことが、この地域に最も適したやりかたなのです。

五、地域の実態を無視した 大規模草地計画

私達は、なにも自然を絶対改造すべきないというつもりはありません。人間の生活を維持するのに必要な生産のために自然にはたらきかけをするのは当然のことです。しかし最近の開発は、土木、建設、機械資本を喜ばせるためだけの計画が多いようである。本当に私達と子孫のために必要なことかどうかをみきわめなければなりません。そういう立場から、この大規模草地計画を考えなおしてみましよう。

大野町は函館市から近く、気候温暖なた

め、水稲のほかには野菜作りが盛んなところ。昔は八〇〇頭もいた馬が現在では二〇〇頭ほどになり、そのかわり乳牛や肉牛がふえています。しかし、畜産專業農家というのはいくなく、ほとんどが水稲との複合経営です。そのため、ここ二十年くらい家畜頭数はふえていません。今後とも、大幅な家畜頭数の増加は期待できないところ。それは、草場がたりないためばかりでなく、経営の主体が水稲と野菜であるからで、畜産は水田と野菜畑の地力を維持する既肥源としての役割が強いものです。それでも一部の畜産農家は、飼料基盤がしっかりすれば、飼養頭数も増やせ経営が安定するとみられています。そのために計画では木地挽に五〇六haの草地造成を七億円かけておこない、さらに機械を入れて乾草生産をして畜産農家に供給するとしています。夏の放牧地としては最適であるシバは草量が少ないので採草むきではありませ

せん。しかし木地挽のような山では、牧草に変えても乾草生産が期待できるほどとれません。草量を期待するのならば、平地の農地が一番です。

ところが大野町は、新幹線計画以来土地ブームで、レジャーランド、ゴルフ場、別荘用地に、一級農地がどんどん転用されています。大切な農地を土地投機の対象にし

ておいて、牧草場がたりないというのもおかしな話です。農用地の不正売買を許していた町当局に、本当に農業の将来を考える気があるのでしょうか。

六、責任のない計画立案

開発局にきくと、地元市町村から正規の手続きであがってきた計画だからそのまま尊重するしかないといっています。ところが町役場にいわせると、上からおりにきた計画だといっています。ある関係者は「大規模草地計画のために、町が赤字をよけいしよいことになるのは覚悟している。これは農林省に対する義理のようなもので、ほかの町村で受けられなければここで受けるしかない」というように、農林省や開発局が聞いたらあわてるようなことをいっています。

一九六五年に三三三頭(二戸当り二・三頭)であった肉牛は、一九七二年になっても三三三頭(二戸当り二・七頭)にしか増えていません。これを、あと六年の一九八〇年に二、六一〇頭(二戸当り二〇頭)の七倍にふえる計画と結びつけるのは無理なよう

です。

都市近郊農業の特徴を生かした総合的な計画立案が必要で、家畜飼養農家は全部水田や野菜作りをやめるのか、狭い耕地で糞尿の処理は可能か、流通計画はだいじよう

ぶかなど、いろいろな問題点があります。現在でも、町費の持ち出しが大きい町営預託方式の牧場が七倍にもなっていてやっているのか、町税支払者の同意がえられるのか疑問です。計画どおりにいかなくても責任をとる必要がない現在、せめて立案段階で住民の声を十分に聞いてほしいものです。

七、観光的価値もシバのほ うが高い

産業的にみても防災上からも、木地挽のシバをつぶすのは疑問が残りますが、あとは観光価値としての評価です。この大規模草地計画は、悪く考えれば、良い道路がほしい、そのために、すでに造成したところのやり直しを含めて無理やり五〇〇ha規模の草地造成地を用意して、国営草地改良事業にのせたという感じ。しかし、せっかく立派な舗装道路をつけても、肝心のシバがなくなるとは、この観光価値は下落します。雄大な景色を背景に日本で最北端のシバ牧野ということならば魅力があったのに、どこにもある牧草にかえて、尾根を切りひらいた道路が通るようになってはおしまいです。日本でも珍しいシバ草地を大野の宝として大事に利用してほしいと思

います。

(羊ヶ丘自然資料館)